『教養学部報』第 522 号　(2009 年 7 月 8 日号)

「討議力を鍛えよう」

杉之原真子（教養教育開発機構）

大教室は、後ろの席から埋まっていく。先生が教壇に現れ、授業開始。一時間半、睡魔と闘いながらノートを取る。試験前に誰かのノートを借りれば充分、来週から来なくていいや……。

こんな風景が、大学の授業の一般的なイメージかもしれません。しかし、外国から学んだ知識を伝えることが高等教育の重要な使命だった時代には通用したこうした授業方法は、新しい知を創造することが求められる時代には不向きではないか。そんな考えから、教養学部のプログラム「討議力養成」がスタートしました。

「討議力」とは、競技型ディベートで相手を言い負かす能力という意味ではなく、もっと広く、コミュニケーションを通じて学ぶ力全般を指しています。

例えば、自分で問題を発見する力、自分の考えを説得的に表現する力、他者の意見を聞く力、自分の考えを相対化して視野を広げる力などが含まれます。大学教育においては知識を得ることももちろん大切なのですが、得た知識をもとに自分の考えを組み立てて表現し、さらに他者と意見を交換することで、物事をより深く理解し、新しい知を生み出すことができるのです。また、国際化が進む現代社会では、あうんの呼吸で分かり合えた日本流のやり方が通用しない場面も増えていくでしょう。そうした際に、お互いの立場を理解しつつ、しっかりと交渉を行うためにも、討議力は不可欠です。

このような力を教養課程で身につけてもらうには、どのような授業のやり方が適しているのでしょうか。一方通行の講義は、知識を伝えるには効率の良いやり方ですが、それに加えて、学生による研究発表やディスカッションを取り入れることで、自分の頭で考えつつ、人の意見にも耳を傾けて学ぶ態度を涵養することができるでしょう。

授業を変えるための一つの方法は、教室のあり方を変えることでした。学生が黒板のほうを向いて並ぶ従来の机・椅子の配置では、学生は受け身の態度に終始しがちです。そこで、「討議力養成」プログラムでは、１号館の６教室を改装し、互いの顔が見えるコの字型の配列としました。2009 年度の夏学期から、基礎演習の授業の多くや一部の語学の授業、全学自由研究ゼミナールなどがこれらの教室で開講されています。

教室の一つを覗いてみましょう。そこでは、基礎演習の授業が行われています。１年生 20 数名がコの字型に座り、教員を囲んで意見を交換しています。途中で机を動かしてクラス全体をいくつかの小グループに分け、グループ・ディスカッションがはじまりました。さっきは指されないようにうつむきがちだった人も、少人数に分かれると積極的に発言をしています。各グループは、小型のホワイトボードにキーワードや図を書き込みながら、議論を深めます。

隣の教室は、英語のライティングの授業中です。学生同士が互いに書いたものを読み合い、内容について話し合うピア・レビューを行っています。英作文といえば、先生が添削してくれるものだと思っていましたが、仲間の書いた文章を読むと刺激になるし、よりよい文章を書くにはどうしたらよいかを自分で真剣に考えるようになりました。

最後に強調しておきたいことが一つ。討議力を鍛えるには、ただ授業に出ていればよいわけではありません。普段から、情報をどん欲に取り入れつつも、批判的な視点も忘れず、常にさまざまな視角から問いかけを繰り返す。授業にも、自ら積極的に授業を作るという態度で臨む。そうした姿勢を持つことで、教養学部の豊富な知的資源をフル活用して、討議力を身につけた社会のリーダーとなっていくことができるのです。学生の皆さん、新時代にふさわしい授業を一緒に作っていきましょう。